



## ラングストン通信④

ラングストン大学アメリカヤギ研究所

塚原洋子

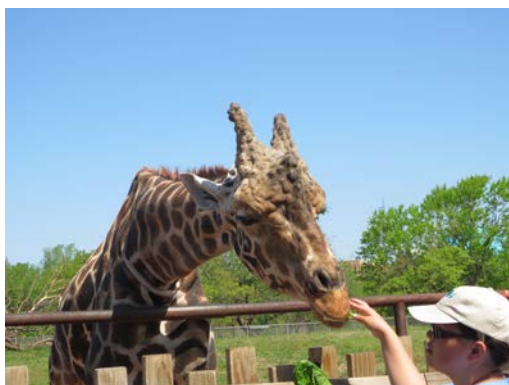
3月初旬に夏のような陽気が続き、早い春の訪れを予想しましたが、3月下旬から天候が崩れ、4月中旬には氷雨が降り、4月下旬には氷点下を記録しました。毎年4月最終週に行われる恒例の「Goat Field Day」も、寒空の中での開催となりました。そんな中でも、たくさんの新しい命が誕生し、目を楽しませてくれています。研究所では、400頭余りの子ヤギが生まれました。4月に降り注いだ雨は、大地に力を与え、新緑と色鮮やかな花々をもたらしてくれることでしょう。これからのオクラホマは、竜巻と雷雨のシーズンです。刻々と変化する天候に注意をしながら、天空のショーを楽しみたいところです。



研究所の池に住むガチョウの親子

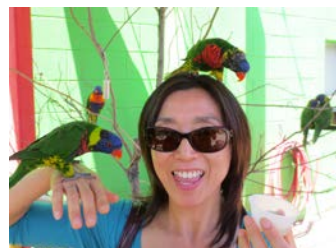
## オクラホマ動物園へ行ってきました！

とある天気の良い日曜日に、オクラホマ動物園へ出かけました。オクラホマ動物園は、100年以上の歴史（1904年開園）がある、アメリカ南西部では一番古い動物園です。



広さは、植物園と園内湖を含めて 119 エーカー（48ha）あり、哺乳類、鳥類、爬虫類、昆虫類、水中生物や魚、植物まで多彩なコレクションを誇っています。国内最大（約 2000 平方メートル）の屋外型蝶ガーデンでも有名です。園内では、ゾウやアシカのショーをはじめ、様々なアトラクションを楽しむことが出来ました。『キリンの餌やり』は、ロメインレタスをキリンが手から直接食

べてくれます（一人レタス3枚、3ドル）。『ロリキートとのふれあい館』では、手に持った果汁カップを目掛けてロリキート達が飛んできます（果汁カップひとつ3ドル）。オクラホマトレイルと名づけられた遊歩道では、クロクマ、ハイイログマ（グリズリー）、クーガー、バイソン、コンドル、カワウソ、



アメリカアリゲーター、ロードランナーなどオクラホマ在来の動物を知ることが出来ました。動物園まで来なくても、スカンクやアルマジロ、アライグマ、オポッサム、ガラガラヘビ、ワニガメなどとは普段の生活で遭遇することがあるのですが、それ以外にもたくさんの野生動物がいることに驚きました。州内の国立公園へもいつか行ってみたいと思います。



さて、動物園の楽しみで外せないのが、子供ふれあい動物園。アメリカでもヤギは子供達に大人気、たくさんの親子連れでにぎわっていました。ここでは、ヤギのほかにもヒツジ、ポニー、ウサギ、ニワトリなどが農場の動物として展示されていましたが、ヤギ以外はみんな囲いの中に入れてられていて、子供達が自由にふれあうことが出来るのはヤギだけでした。子供達にとってヤギは他の家畜よりも安全な動物だということですね。

### Goat Field Day 2013

4月27日、アメリカヤギ研究所で第28回目のGoat Field Dayが開催されました。気温10℃を下回る寒空で、事前登録申し込みよりも少ない200人程度の参加でした。今年のテーマは、”Enhancing Goat Products (ヤギ製品の向上)”ということで、フランスのヤギチーズ製法、ヤギ肉に対する消費者の意識調査、アメリカにおけるヤギ肉の枝肉組成などについての招待講演が行われました。屋内に設けられた講義室では、



子供向けアトラクション、ポニーライド

発表者と参加者の間で質疑応答が活発に行われ、参加者（主に生産者）の製品に対する意



屋内の講演会場

識の高さが伺えました。ランチタイムは恒例のヤギ肉ハンバーガーとヤギ乳チーズ、ソフトクリームでしたが、毎年人気の高いソフトクリームも、今年は寒さで低調だったようです。その一方で、本場フランスからチーズ職人の Anglade 氏を招いて開催したヤギチーズ製造ワークショップは、大変

な人気でした。出来上がったチーズも美味しく、アメリカ産のチーズとはひと味もふた味も違ったものでした。午後からのプログラムで興味深かったのは、科学雑誌などにヤギの絵を描いているイラストレーターWilliams氏による「ヤギを描く」というワークショップでした。彼のヤギの品種や行動を描いた絵は、実に生き生きと生きているように素敵なのですが、実際には細かい観察と各パーツの比率を正確に分析しながら描かれていると知り、納得の講義でした。今年のGoat Field Dayの抄録集は、以下のサイトからご覧いただけます。

< <http://www.luresext.edu/goats/library/field/fd13.htm> >

## 気候変動とヤギ

昨夏の早魃と日照りに加え、春が一向に始まらないオクラホマで、気候変動について思い巡らせています。気候変動が叫ばれるようになって久しく、実際に世界中のあらゆる地域で変化が起っていますが、その一方で気候変動を否定する説もあります。先の見えない恐怖に振り回されることは、好ましくない面もありますが、史実に記されている範囲を超える自然の脅威の可能性を無視せずに、ある程度の先手を打っておくことは無駄なことでは無いのかも知れません。アメリカでは、気候変動は現実に行進しつつあるものと受け止められており、USDA NIFA（農務省国立食糧農業研究所）の研究助成でも、気候変動に対応した研究案件に500万ドル（約5億円）が用意されています（2013年採択分）。

1万年近く前にヤギが家畜化されて以来、様々な野生動物が人間の食用となるために家畜化されてきました。家畜化された動物達は、環境による自然選抜と人為的な選抜を受けて人間が利用しやすい形態、性格、生産能力を獲得するように変化してきました。特に家畜育種学が発展した1960年代以降は、生産性向上を目的とした改良と選抜がものすごいスピードで進行し、飼養管理学の発達とともに家畜は人々の食生活に欠かせない存在になりました。その一方で、ある種の家畜はその優れた生産能力と引き換えに、精密な生産マシンと化し、人工的に整えられた環境無くしては生存できない生物になりました。やや言い過ぎかも知れませんが、環境への適応能力は著しく低下したのです。今後起こりうる気候変動では、人工的に整えられた環境を維持することが難しくなる可能性があります。特に、放牧を主体とした管理環境では、すでに干ばつや日照り、洪水が各地で家畜生産を阻んでいます。乾燥地における塩害も広がっています。家畜の中で、ヤギは幸いにも生産能力による改良をあまり受けて来なかったために、他の家畜よりも比較的環境への適応能力が高いと言われています。高い環境適応能力は、飼育環境を整えるために費やす労力が最小限で済むため、これからが本当にヤギの出番かも知れません。

## アメリカのヤギ雑誌

アメリカでは、さまざまなヤギ雑誌・ヤギ新聞が発行されています。これらは、学術雑誌とは一味違い、写真やさまざまな話題が豊富で、休憩時間の友になっています。

ここでは、Meat Goat Monthly News、Dairy Goat Journal、Goat Rancher という3部をご紹介します。まず Meat Goat Monthly News は、その名の通り毎月発行される新聞（1部\$3.75、年間購読\$27）です。全米各地で開催される肉用ヤギのイベント（品評会）情報やヤギ肉の販売価格などが毎月更新されています。例えば今年の3月号では、子ヒツジ肉が1ポンド（454g）当たり\$1.50～2.06 で取引されているのに対し、子ヤギ肉は\$1.80～



Meat Goat Monthly News

関連団体、登録や登記、生体および精液の販売、せり、飼養施設や設備、ヤギグッズなど広範囲なヤギに関する情報交換の場になっています。ヤギの面白写真やヤギ肉を使ったレシピなど、読者からの投稿も多く、「ヤギの友」同様、毎号楽しみにしています。

2.58 で販売されていると書かれていました。Dairy Goat Journal は、隔月発行で年間購読が\$21 です。こちらはヤギ乳生産の雑誌なので、子ヤギの育て方や、個体識別の入墨の仕方、乳製品加工などについての情報が掲載されています。また、Goat Rancher は、毎月発行で年間購読が\$29 です。こちらは、ビジネスとしてのヤギ生産（経営）の情報が比較的多いような気がします。いずれの雑誌も、

## 第10回 ACSRPC シンポジウム

小反芻家畜寄生虫制御アメリカコンソーシアム（ACSRPC、<http://www.sheepandgoat.com/ACSRPC/index.html>）の第10回記念シンポジウムが2013年5月20-22日にジョージア州のフォートバラー州立大学で開催されます。

寄生虫の生態学や様々な寄生虫対策（タンニン、ワクチン、FAMACHA システム、葉草類の利用）、世界の寄生虫事情紹介に加え、FAMACHA の研修会および資格認定など盛りだくさんのプログラムが発表されています。次回のラングストン通信は、シンポジウムへの参加報告と寄生虫対策特集を予定しています。どうぞ楽しみに！



←FAMACHA カードを用いた貧血検査